

テキヤの Patent

— 米国の IP 戦略に関する若干の考察

(概要) 金利生活が理想

レマン湖を見晴るかす優雅なホテルのテラスで、会社の同僚数人と昼食を摂った。三ヶ月に一回、期毎の全体会議も、今回はそれにプラスしての株主総会も終わり、後は日本に帰るだけののんびりとした午後である。スイスでは失業率が10%を超えた、若者のそれはもっと悪く20%近いのではないかという話題が出る。何しろ、旗艦の時計産業が、お前のところの日本に壊滅させられたからな、と悪気のない冗談も出る。それにしても、どう見ても皆さん裕福そうではないかと僕が反撃する。実際、週日の金曜日というのに、どう見ても観光ではなくビジネスマンと見える客が周りのテーブルのあちこちでのんびりと初夏の午後の食事を楽しんでいて、一向に席を立つ気配もない。ここ、ローザンヌ市はジュネーブから鉄道で子一時間の美しい街である。勤めている会社の欧州本社がここにあるために、僕も何度か訪れているが、来るたびにその豊かさに圧倒される。

何しろ俺達ヨーロッパ人の理想は、「interest」で優雅に生活することにあるからな、と一人が言う。なるほどそれは興味 (interest) 深い話だ、と僕がへたな駄洒落を言う。ちなみに、スイスのこのあたりではフランス語が母語であるが、フランス語が一言もしゃべれない僕が混じっているために会話はすべて英語である。彼の言う「interest」は、英和辞書を引くと真っ先にでてくる「興味、関心」という意味ではなく、利権、あるいはもっと具体的に「利子、利息」という意味だろう。社会の階級という存在がまだ色濃く残っているヨーロッパにあつては、なるほど、上流階級の理想はあくせく働かずに利息で優雅に暮らすことなのだろうと、僕は一人で納得する。この席にいる同僚たちも、一流の大学をでた最先端のエレクトロニクスの技術者だから、言ってみれば上流階級に属しているわけだ。

しかし、皆さん会社でえらい勢いで働いているではないか、と僕は水を向ける。実際、製品開発に携わっている技術者やマネージャークラスは、日本の企業の技術者と同じようによく働くのだ。それはそうさ、若いうちはそうやってお金を貯め、できるだけ早い機会にリタイアして、後は優雅に暮らすためさ、と誰かが言う。利子で暮らすだの、早くリタイアしてのんびり生活を楽しむだのという人生設計がまったく頭のない僕には、何か違和感が残る。

ともかく、ここスイスだけでなく、国が破産寸前と報道されているイタリアでも、たいへんだたいへんだと言いながらなんだかのんびりと豊かに暮らしているな、というのが僕の常からの観察なので、利子生活理想説は、納得できる。そして、思いは、ヨーロッパの分派の米国の人々、とりわけその中でも金持ち層、社会のエリート層はどうなのかと広がる。ここにいる仲間もそう

テキサスのパテント

だが、ヨーロッパの人とはかくアメリカ人を馬鹿にする。アメリカ人を前にすればさすがに悪口は控えるが、彼らから見れば、ヨーロッパと同じく直接的に間接的にあつかましいアメリカに痛めつけられている日本は仲間に見えるのか、僕の前ではアメリカの悪口は聞きなれたところだ。しかし、僕からすれば、基は同じじゃないかという思いが消えない。アメリカ人という独自の存在にはなったが、僕から見れば西欧文化の一派ではないかということになる。アメリカ人も利子生活を理想としているのだろうか。どうもそのようだ。やはり西欧一派だ、と僕は思ってしまう。

とはいえ、アメリカは広い。とても一からげに論じることはできない。ニューヨークやボストンの東部海岸では、まさに金融の「interest」で動いているのだろう。それは銀行預金の利息であり、株の配当や売買であり、為替操作の差益であるだろう。南部のアトランタあたりでは、多分建国以来の、綿花大農園主の名残の、優雅な「あがり」であろう。テキサスへ行けば、それが牛の大牧場主や石油油田の所有者の優雅な収入に代わるのだろう。カリフォルニアでは、ハイテク産業への投資とその高額のリターンということになるだろう。アメリカの上流階級もやはり、利息 (interest) で優雅に暮らすのが理想なのだ。そのために一度つかんだ権益 (interest) は絶対放さないのだ。

ローザンヌでの会話は、今からもう10年ぐらい前の思い出である。しかし、知的財産 (intellectual property) あるいは知的財産権 (IP right) という面から、アメリカの動きを眺めてみると、そこには、当時教えられた彼等の理想、生活哲学、あるいはコンセプトである「interest」で優雅に暮らすのが、そのまま生き続けていることを感じる。あるいは、もっと露骨な形で、戦略として採用されていることが分かる。

ものの本によれば、米国がプロパテントに政策変更したのは、1985年に出された通称「ヤングレポート」からだと言う。そうであれば、先のローザンヌの会話よりも10年も前の、既に20年も前から話と言うことになる。そういえば、当時カリフォルニアでは、日本の製造業の「アメリカ侵略」は、日常の話題であった。家電だけでなく日本のコンピュータも槍玉にあがっていた。幻と終わった通産省の第五世代人工知能コンピュータ計画も、当時は大いなる脅威として論じられていた。一方、アメリカの自動車はその品質欠陥が騒がれていた。新車のドアが二週間でがたがたになった、調べたらボルトが何本も付け忘れられていたとか、その類の話には事欠かない状態ではあった。確かに、米国は、現状を分析して、戦略を変換したのだ。それがどのようなものであったか、今現在ますますその露骨さを増している動きを、これから概観してみようと思う。テーマが大きすぎて、もちろん手に余るが、彼等の動きは割合単純なので、見えない話ではないだろう。

テキヤの patents

主に日本からの製造業での攻勢に晒された米国が1980年代広範に採用した方向は以下のようなことであつたし、今もそれが続けられている。

哲学、あるいはコンセプトとしては、「利子で稼ごう」というものだろう。これは、彼等の生活哲学に沿うものだから、多くの人、もちろん上流階級の人々、が納得するところであつたし、今も受け入れられている考えであろう。

戦略の基本は、本田宗一郎さん流に、「得意に帆を上げて」、つまり自分たちが得意とする分野に集中して、その実現のための実施計画を入念に仕立て、グローバル規模で実行していくことであつたらうし、今も、更に露骨に推進されている。

1. 得意の産業分野を IP で推進する

得意の産業分野、強い産業分野には、まず、ソフトウェア、バイオテクノロジーが上げられる。これらは知的財産権で保護し、ロイヤルティ収入を世界から吸い上げる。方策として、ソフトウェアの patents を認め、広げ、同じくバイオの世界でも patents の範囲を際限なく広げて、何でも patents に認めてしまう。この、 patents の範囲を際限なく広げていく米国の IP 戦略に対して、欧州や後進開発諸国から強い懸念が表明されてきているが、今のところ歯止めが掛かった心配はない。

2. 強い産業は国の後押しでますます強くする

製造業そのものでまだ勝てる分野、例えば宇宙航空および関連軍事産業では、製品で世界を圧倒し輸出攻勢を続ける。米国製造業というより米国そのもの象徴でもあつた(と過去形でいうべきかどうか)自動車業をどうするつもりなのかは、興味深いテーマである。

3. 米国式システムの世界標準化とロイヤルティ収入

強い情報システムや経営システムでは、ビジネスメソッドという patents 分野を創出し、ここでもロイヤルティが稼げるようにする。それ以外にも、もちろん、本来の利子や配当、為替益で稼ぎ続けるために金融システムのグローバル化は当然のところであるし、資本投下による見返り収入を世界のどこからでも上げられるようにするために、資本の自由化の推進も極めて明快(露骨)な戦略の下に進められている。

4. ハリウッド式コンテンツを世界中に

ハリウッド映画に代表される娯楽産業では、当然著作権(copy rights)の強化が必要で、先の patents とあわせて総合的に、「通商産業(trade)に関連した知的財産権の合意 TRIPS」として、世界機構の下で実行強制権を発揮できるようにする。日本のように、順法精神がいき

テキヤの patents

わたっている国はまったく問題ないが、「コピー」に関する常識が違う中国の存在は、その市場の潜在力が桁外れに大きいだけに、ここしばらくは米国にとって大きな頭痛の種であろう。

5. 貸間業

頭脳の不足を補うために、シリコンバレーという立地条件が存在することを幸いに、そこに世界から頭脳を集め、資本を投下し、成果である patents は社員雇用契約の下で会社に所属するものとして保持する。「人のふんどしで相撲をとる」という句があるが、シリコンバレーはそのやり方の大成功例であり、勞せずして、ハイテク産業の世界の頭脳司令部を形成している。

6. インテレクトゥアルプロパティ/ナレッジ/インフォメーションの時代提唱

製造業で敗れたことを逆手に取り、製造業はもう時代遅れである、これからは知識ベースの産業、社会であるとか、第二次産業(製造業)から第三次産業(サービス業)の時代であると、大学を巻き込んでアカデミックな装いの下で喧伝する。プロパガンダという面では大成功を収めた作戦であり、特にノーテンキな人が知的指導層に多い日本なんぞはいい鴨にされて、製造業でしか飯を食べない現実を忘れて、お先棒を担ぐ人も輩出した。

7. 競争と独占

自由競争社会(反独占 Anti Trust)という建国以来の旗印と、知的財産権利の拡大強化による独占権の広がりという矛盾を適宜問題意識として取り上げ、社会の懸念を和らげる。商務省、司法省、FTC(フリートレードコミッション)とマイクロソフトなどのメジャー企業が入り乱れて、あるときはまじめに、あるときは「やらせ」でバトルを繰り返している。

8. 英語という国際標準を最大限利用

英語が唯一の世界共通語である強みを最大限利用する。英語で各種システムや知的財産権のグローバル化を広げ、そのグローバル化が英語を広げるという好循環。

9. 資本投資効果最優先

資本を投資して、その高リターンを得るという事業は、もちろん「利子で稼ぐ」哲学の下での最重要戦略の一つである。投資した企業が金の卵を(早期に)生むようにするために、リストラチャリング(restructuring)、リエンジニアリング(reengineering)などと称される企業経営システムの導入を経営陣に強制するのは当然のところである。ここでは、もちろん、ものづくりに必要な、製品への情熱とかチームワークなどは一顧だにされない。

10. 知的財産権を主張しない人々

西欧社会の伝統の一つである、博愛、奉仕の精神を受け継いでいるのか、知的財産権という面においても、自分の発明をお金に換えるつもりがない人々がいる。彼等のお蔭で、ウェブ(Web)が世界に広がり、また Linux というオープンソースが広く利用されるようになった。米国においても、これらの確たる信念に基づいて行動している人とそれを支える多くの人がいることを忘れてはならないだろう。

僕がローザンヌでのんびりおしゃべりしている間に、あるいはシリコンバレーで東京でワッセワッセと飛び回っている間に、米国はこのように手を打ち、着々と成果を上げてきているわけだ。島国でノンビリ暮らしてきたわれわれとは比べ物にならないほど、厳しい生存環境で暮らしてきた彼ら西欧人は、戦略が大好きな集団であるし、得意である。戦略とは、限られた資源を絞った分野に集中的に投入し、最大限の効果を上げる、つまり相手に勝つ、策であるとするなら、彼ら米国の国策としての知的財産権戦略は、「得意に帆を上げて」見事であるといえるだろう。かつては世界の牙城であった製造業を、そう簡単に見放すことはありえないと思われるかもしれないが、彼ら、特に上流階級の人々は実際のところ、汗水流して製品を作ることなどは好きでもなんでもなく、儲かるならやるし、儲からなければやめるだけと考えているのではないだろうか。誇りにしてきた自動車産業でさえも、「あがり」さえ十分に得られれば、売れる車作りは得意とする日本人に任せても良いと思っているのではないだろうか。

苦手のことを克服するには、あるいは巻き返すためには、得意のことを発展さすより何倍もの努力が必要であることが、よく分かっているのだろう。「得意に帆を上げて」知的財産権に邁進する彼等の動きを、上に大筋を記した10分野で、これから眺めていくことにする。

ハリネズミの patents

－日本の IP 戦略に関する若干の考察

(はじめに) モノづくりジャパン

シリコンバレーの南、つまりサンフランシスコ湾の南端にサンノゼ市 (San Jose サンホセ) がある。ここは、戦前 (太平洋戦争) 日本からの移民の拠点のひとつとして、日本には関係の深い土地でもある。今から30年近く前、このあたりはまだ移民時代の名残を残して、果樹園が広がり、その間にまばらにはあるがハイテクの工場やオフィスが建ち始めていた。当時、この日本人街の食堂、レストランというより食堂の方がイメージに合うお店で、地元の人に、日本人移民が成功したビジネスに二つあると教えられた。一つは花屋 (花栽培農園) で一つは洗濯屋であるという。その話を聞きながら、僕の頭の中では、「キレイ」という言葉が繰り返し浮かんできた。

僕ら日本人は、「キレイ」と言う言葉を4つの意味に使い分ける。「キレイなお姐ちゃん」というときは、もちろん「美しい」という意味で使っており、お母さんが遊びから帰ってきた子供に「手をキレイに洗ってらっしゃい」というときは「清潔に」という意味で、「勉強机はキレイにしておきなさい」としかるときは「整理整頓」の意味で使われている。更に、「あの人はキレイな生涯を送った」と賞されるときは、倫理的に正しい生き方を全うしたという意味になる。一つの「キレイ」でこれだけの意味をもたせるとは、さすがに「キレイ好き」な日本人である。

サンノゼの日本人移民の花屋さんは、もちろん日本人の優れた美的感覚を基礎においての成功であろうし、洗濯屋さんの成功は、その清潔さの追及と、預かった衣服の管理と納期厳守の「整理整頓」が基本にあったのだろう。もちろん、絶対にインチキしない倫理的キレイさが、かつての日本人の特徴であったから、一番の基礎にはこの「キレイさ」が誰にもあったのだろう。

モノをつくり、お客様にその製品を届けるためには、この「キレイ」が欠かせない。これまで様々な民族に属する人々と会ってきたが、モノづくりに適した民族、モノづくり大好き民族はほとんどいないというのが僕の感想である。例えば、新規発明が得意 (とかつてはいわれた) フランス人はどうだろう。今から40年以上も前にフランスのシトロエンは油圧で車高が自由に変えられる乗用車を開発製造し、世をアツといわせた。しかし、フランス人の友人から聞いたところでは、この車のエンジンルームは電気配線やらパイプやらがグッチャグチャで、とても大量生産ラインに乗るような代物ではなかったらしい。(その後改善されたのかどうかは聞き漏らした)。例えば中国人はどうだろう。95年ごろであったと思うが、上海から蘇州にあった工場へ向かう車中から見た、道路の両脇に広がる水田の風景も忘れ難い。実に、畦道が

ハリネズミの patents

デタラメに、つまり水田の区画が好き勝手に引かれており、見ていて気分が悪くなった。幾何学的にキレイに引かれた日本の水田を見慣れて者としては、とてもではないが、他人事ながら、承認し難い様相を示していた。この印象が強すぎるせいか、少なくとも今のところ、僕は中国の人々のモノづくりは信用していない。

時計産業でかつて世界を制覇したスイス人はどうだろう。

整理整頓の権化のようなドイツ人はどうだろう。

これらの楽しい話題は—他の民族や地域の人々の在り様を酒のつまみにして、あれこれ品定めするのは国境を越えて誰にも共通する楽しみの一つである—、とりあえず置いておいて、日本および日本人について考えたい。

僕自身がそうであるし、日本人の過半、多分圧倒的多数は、モノづくりが好きと言えるのではないか。そうでなければ、黒船の出現(1853年)までの日本社会の成功も、それ以降の、いわゆる日本近代化の成功も説明がつかない。僕からいわせれば、官僚が優秀だったからでも、企業経営者が優れていたからでもなく、ひとえに日本人のものづくり好きが、今日の日本をもたらしている。ホコリだらけで整頓されていない半導体工場などありえないし、鉋屑や木っ端をそのままにして帰る大工さんがいるわけがない。品質不良品を市場に出して平然としている技術者に会ったことはない。(最近このあたりの話は相当に怪しくなっているのだが)。

小学生でも知っているように、日本には鉱物などの資源はない。しかし、日本人には「キレイ」の精神あるいは美学があり、知力があり、(全員ではないが)モノづくりの腕がある。「モノづくり」が得意であり、その「得意に帆を上げて進む」ことが、世界の中でそこそこに生きていく上での中核の戦略であることは、極めて自明のことではないだろうか。もし、このことが分からない人がいるのなら、その人は、額に汗してお米を作ったりコンピュータを作った経験の無い、また、これまでの日本がどのようにして世界の中でその地歩を築いてきたのか、無学にして知らない人であろう。

一方、しかしながら、世界は知的財産権(IPR)だの何だのと騒々しくなっていており、僕ら日本人もこれまでのように、黙々と(語らず)良質の製品さえ世に出していけば、そこそこに食べていくというわけには行かなくなっている。また、お手本にすべき技術や製品の情報だけに眼を注いでおけばよいという時代ではなくなっている。お手本自体が既になくなっているのだから、情報の入手力と分析力が、これまでとは桁違いに必要なようになってきている。

これらのことが、どういうことなのか、これから眺めていくことにしよう。

ハリネズミの patents

1. 無口な職人の伝統

でしゃばらないという日本文化の伝統をベースに、男がペラペラしゃべるものではないという武士の矜持が普遍性を持っていたこともあり、技術者には無口な職人の伝統が生きている。これは恥じる必要はまったく無い価値ある姿勢であるが、とにかく大声で主張することを主流とする西歐文化式の中では、極めて不利な点として作用する。

2. 製品防御の patents (ハリネズミの patents)

日本企業、主としてメーカーの特許出願は内外に膨大な数がなされているが、その主流は、製品を防御するための patents であろう。製品が売れて、初めて銭になるのであって、patents 自体で銭を稼ごうという考えから出願しているわけではないだろう。それが健全な考えであることは、何で食っているのかを考えればおのずと明らかである。

3. 創造性を銭にすること

米国の IP 戦略のまねをしたのかどうか知らないが、政府のいわゆる知的財産立国戦略(「知的財産戦略大綱」2002年7月知的財産戦略会議、および「知的財産の創造、及び活用に関する推進計画」2003年7月知的財産戦略本部)には、日本人の創造性を高めそれで稼ごうという戦略が記されている。この戦略は、中学生の作文レベルのものであり、そのようなことが、どんなに努力しても少なくともこれからの50年間ぐらいは、不可能事に近いことは、企業社会で経験してきたもの、すなわち実戦で苦労してきたものには明らかである。一言で言えば「無理ダッ!」。創造性を尊重する社会にはぜひなってもらいたいが、独創や異端を嫌う性向は日本人社会のこの400年の歴史における特徴であり、そう簡単に変えられるものではない。今現在、前線でドンパチやっている者から見れば、今の戦いにまったく役に立たない寝言と聞こえるだろう。

4. コンテンツを銭にすること

同じく先の戦略大綱には、「アニメーションやゲームソフト等のコンテンツ産業は、国際的に高く評価されている」とあり、「ものづくりに加えて、技術、デザイン、ブランドや音楽・映画等のコンテンツといった価値ある「情報づくり」、すなわち無形資産の創造を産業の基盤に据えることにより、我が国経済・社会の再活性化を図るというビジョンに裏打ちされた国家戦略である」、と記されている。

冗談でしょう、本気かいな、というところだ。ここでいわれている「無形資産」でどれだけ銭が稼げるか、何人の日本人がそれらで飯が食えるのか計算しましたかと問いたい。映画の黒沢明さんやアニメの宮崎駿さんといった天才の存在は日本人の誇りではあるが、これで多くの人が飯を食えるとは、僕には到底考えられないのだが。ましてや、ゲームソフトが世界中の多くの親から、子供の教育という面で響きをかっている存在であることはご存知ないのであ

ろうか。稼げれば何をやっても良いと言うなら、コロンビアの麻薬王と同じになってしまうのではないのでしょうか。

5. 製品超一流、特許明細書三流(?)

先の太平洋戦争の敗因の一つに製品品質があったことを自覚して、戦後40年、必死に良い製品作りに励んできたお蔭で、85年半ばには、様々な分野で日本企業の製品は世界でナンバーワンの位置を占めるまでになった。それからまた20年。現在その勢いはかつてのものがないようだが、その原因の一つに、製造業のあずかり知らぬところで行われた「バブル」の影響を間接的に受けたことがある。簡単に言えば、違う産業分野や政府から足を引っ張られたわけだ。

一方、視点を変えて、海外に、主に製品防御のために出願し取得されている特許明細書の実情は、どうなっているのだろうか。世界に冠たる製品品質に比べて、その製品を守るべき「特許明細書」の品質はあまりにもお粗末なのではないだろうか。特許明細書は製品の一部とは見なされていないのだろうか。製品は超一流、明細書は二流あるいは三流というギャップがあるのではないだろうか。大丈夫ですか？

6. 言葉を軽視してきたツケ

日本の企業、特にメーカーの中において、長年の、社員の言語能力の軽視は、今大きな負債となって影響して来ていると思える。特許明細書(仕様書)だけでなく、製品仕様書、システム仕様書、すべてにおいて言語で記述しなければならないのは言うまでもない。外国の企業とやりとりするには、ボディーランゲージではなく、言葉で行うしかない。英語だけでなく、例えば、今、大きな市場として展開を始めた中国に対して、社員の中で中国語を扱える人がどれだけいますか？中国語も知らずに戦争をするのですか？例えば、米国籍の企業では、社員に中国人がいるのは当り前の姿である。彼らを使えば中国とのコミュニケーションは容易であるし、中国への特許出願も彼らを使えば相当程度楽に処理し、チェックができるだろう。日本の企業ではどうなのだろうか。

更に、それだけでなく、母語である日本語で仕様書も満足に書けない技術者が増えているとも聞く。「語れる技術者、書ける技術者」無しに戦い続けるのですか？

7. 安土桃山時代の経営者、技術者

1600年の関が原より250年間、日本は鎖国をして平穩の中に過ごしてきた。その中で、他国の出来事に鈍感な村人、田舎人体質が根付き、400年後の今もその体質は変わっていないように見受けられる。日本人は歴史上ずっとこのように他所の動きに鈍感だったのだろうか。そんなことはありえない。鎌倉時代から戦国時代の終りまでの400年間、鈍感であったら命はなかったはずだ。日本各地の動きに鈍い信長や秀吉や家康の姿など想像できないよう

に、情報が生き死にに直接関係してきた時代もあったのだ。その DNA を呼び起こすことが、今緊急の課題として出てきている。

8. 情報の基本は言語

当り前の話だが、情報の基本は言語で成り立っている。世の中には映像情報が氾濫しているが、そこから読み取れる核心は極めて少ない。また、日本人は、概念を図形化したり、製品を図面化したりのグラフィック能力には長けているが、図形で伝えられる情報にも大きな限界がある。日本でも、「情報化時代」というような言葉がもてはやされてきたが、言語能力を高めないので「情報化」などあるのだろうか。IPR も、一部の映像等のコンテンツを除けば、patent にせよ著作権にせよ、基本は言語である。先に挙げた「知的立国戦略」の中で、この言語の課題がまったく論じられていないのはどういうわけなのだろうか。不思議というか、評するに言葉が見つからない。

9. 社会学の勉強を

世界を、政治、経済、科学、技術の面からのみ判断するのは大いに危険である。また、表層の文化や日常生活的面からだけでは捉えられないことは、言うまでも無い。日本人の多くが大好きなヨーロッパや北米の社会と人々がどのような存在なのか、また、今やその存在抜きにしては語れない中国および中国の人々の存在はどのようなものなのか。

対等に付き合っていくためには、彼等の姿を、できるだけ原型で把握する努力を続けるしかない。日本人社会の判定基準で判断することは、互いに不幸である。良い結果にはならない。社会を、人の集団として眺める社会学の手法が大事な科目となる。

10. グローバル時代

ベルリンの壁が消え(1989年)、中国も自ら開放に向かっているから、その面で世界はまさにグローバル化時代である。一方、グローバル化は、自国の、あるいは自分達の都合の良いように、ある意図の下に喧伝されている場合も多いことも知っておく必要がある。それを知らずに、その喧伝に乗って「グローバル化」と唱えていると、いいように足元すくわれかねない。うまく利用されているだけになりかねない。これは一人一人の生存に、一つ一つの企業の生存に直接関わることなのだから。

僕が考える日本のとるべき戦略は極めて単純で、モノづくりという「得手」に帆を上げて、「ものづくり立国」を継続するしかないというものである。その上で、それを補助するために不足している、製品を IPR (知的財産権) で防御するための表現する言語力の急速な向上と、同じく、補助するための、情報入力力と分析力の向上 (インテリジェンス力) ということになる。

第一部の米国の IP 戦略の考察「テキヤの patents」に引き続き、第二部として、上記の10分

ハリネズミの patents

野で日本の IP 戦略をこれから考察していきたい。